

## 三十年そしてこれから

鶴田幸一



エクアドルのエスメラルダスにて、ランチェーラ（オープンバス）のルーフトップに座り、世界最高木のマングローブのあるマハグアールまで悪路を延々4時間揺られて行く。隣の女の子はプロジェクトのカウンターパートの仲間。その子の名前が、いま、どうしても思い出せない。嗚呼！（1995年12月12日、石井力さん撮影）

<門松や おもへば一夜 三十年> 松尾芭蕉の句だ。

おとそ気分の抜けない三十年前のお正月、私たちは東京中野の株式会社「砂漠に緑を」の事務所で車座になり、酒を飲んでいた。誰が口火を切ったか、非営利非政府の任意団体（NGO）でも作ろうという話になった。湾岸戦争でサウジアラビアの現場が終わり、会社の存続が風前の灯火になっていた。食えるか食えないかは後で考えればよし。とにかく私的な組織をつくることになったのである。

「世界92か国にマングローブの鎮守の森を造り、現存面積を倍に増やす」大風呂敷を広げて熱く語る向後さんや宮本さんら御大たちを前に、私は夢でも見ているように終始もうろうと酔っぱらって圧倒されていた。気がつけば、NGOの名前まで決まっていた。「マングローブ植林行動計画」。略称はアクトマン（ACTMANG）。一番若い私がいつの間にか事務局長にさせられていた。

全く名ばかりのポンコツな事務局長だった。事務仕事はそっちのけでベトナムやエクアドルのフィールドにばかり行っていた。事務局の仕事は留守番電話にさせていた。東京に

居るときは事務所の一室に寝泊まりして居候を決め込んでいたので、月 10 万円そこそこの給料でもなんとか生きていった。バブル経済の余波か、銀座の高級クラブで接待を受けたことも二度三度。まるでマンガである。

しかし、故あって、1996 年の年末を潮にアクトマンを辞し、九州に引っこんだ。その後 12 年間は、フリーで働いたり、沖縄の国際マングローブ生態系協会 (ISME) に出仕したり、福岡国際交流協会の囑託でイベントの運営などをしたり……。まあ、いろいろ他所の釜の飯を食った末、再びアクトマンに出戻ったのが 2008 年 12 月。以来、今日までミャンマープロジェクトの担当をしている。

ざっとこれが私のマングローブ遍歴。大学時代に初めて西表島のマングローブ林を調査で訪れてから、還暦を過ぎた今もマングローブとの御縁は続く。人生における出逢いは、まことに不思議なものだ。様々な偶然が必然だったと今では思える。

いま、アクトマンの常勤スタッフはたった三人。向後さんと宮本さんは顧問・相談役として八十を優に超えてなお赫々としておられる。世界 92 か国にマングローブの森を造る夢物語はまだ夢のような話。世界のマングローブ面積倍増計画も、この 30 年間で増えるどころか漸減傾向に歯止めがかからない状況だ。

私たちがやってきたことはまさに『ハチドリの一としづく』の寓話のようなものかもしれない。山火事を鎮めるため、小さなくちばしに水をためて何度も何度も水場と森を往復する一羽のハチドリ。焼け石に水と分かっている、やむにやまれぬ思い。森の生き物たちはそんなハチドリを嗤う。

一個の貧乏 NGO が三十年、活動を続けて来られたのは、時代の波に乗り、人心が背を押してくれたからに他ならない。自画自賛を恐れずに言えば、一片の忘己利他、あるいは無私の行為を世間様が認めてくれた証左でもあろう。

三十年は、芭蕉が詠んだように一夜の夢、一朝の幻のようなものだったか。否、けっしてそうではあるまい。マングローブと遊んですごせた私たちは本当に運が良かった。世間並みに普通の会社や役所に勤めていたら、とても経験できないような楽しくて面白い旅をさせてもらえた。一例だけ挙げれば、エクアドルの浜辺で提供されたグリーンイグアナの肉と卵。意外に美味しかったのを思い出す。そういう一つ一つが掛け替えのない豊かな時間の宝ものなのである。

私たちはすでに年を取った。成し得なかったことは後生の若い人たちに託そう。さりながら、このまま隠退するのも口惜しい。寿命のあるかぎり、そして求められる仕事があるのならば、その場所へ出向いて行って自分たちのできる事を愚直にやっっていくだろう。美しい地球がいつまでも残るように、すべての人類が子孫永代、真つ当な暮らしを営めるように、微力ではあっても、貢献したいとは思っている。

この三十年の実績はともかくとして、アクトマン創立三十周年、実におめでたい。また気分を一新して、これからのことを想う今年のお正月である。